

〔研究ノート〕

土佐派絵師列伝② 六角寂濟

—足利義満の御用絵師—

第三代將軍足利義満(1358～1408)は室町文化を語る上で最も重要な人物のひとりです。「北山文化」と称される現象、たとえば中国美術のコレクション、壮麗な北山御所の建設、あるいは世阿弥の寵愛と能の隆盛などは、いずれも義満の個人的嗜好と当時の幕府政治の安定があいまって生まれたものでした。近年の研究では、こうした義満を核とするさまざまな文化現象は、その特異な政権運営の一翼を担う、政策的側面を強く持つことが強調されるようになっています。武家出身でありながら、当時最高の教養を持つ公家・二条良基らの施した帝王学によって宮中の諸芸に精通した義満は、その視覚文化の一端を担うやまと絵にも大きな関心を抱いたようです。今回取り上げる六角寂濟(1348～1424)は、この義満の御用絵師とも称すべき人物でした。

まずは、史料に見える寂濟の活動を列挙してみよう。

永徳3年(1383)2月、「天神縁起絵巻」を描く。

同年 11月、後小松天皇大嘗会の御事をを行うか。

至徳3年(1386)10月、醍醐寺始願堂後壁面を描く。

嘉慶2年(1388)6月、「目連尊者絵」を描く。時に絵所預。

応永9年(1402)11月、再建内裏の「賢聖障子絵」を描く。

応永12年(1405)8月、禁裏八講図屏風を描く。

応永21年(1414)頃、清凉寺本「融通念仏縁起絵巻」を描く。

同年 5月、六角絵所、義満七回忌本尊を描く。

応永31年(1424)2月、七十七歳で没。

上記のうち、永徳3年から至徳3年には「藤原光増」、嘉慶2年には「藤原光益」で時に絵所預、応永12年には「光益入道」、応永21年以降は「六角寂濟」の名で記されますが、寂濟の孫にあたりと考えられる六角益継が証言するところにより、これらは同一人物であること

が判明します。つまり、藤原光増(あるいは光益)は応永12年までに出家し寂濟を法名とし、工房の所在した場所(六角高倉)に因んで六角寂濟と称したことになります。そして、この工房は六角絵所と呼ばれていました。

史料に見える六角寂濟の絵画制作は、たとえば大嘗会関係や内裏の障子絵など、一見、絵所預に相応しい朝廷周辺のものが多いように感じられます。しかしながら、これらをつぶさに検討すると、実は寂濟の活動基盤はむしろ義満の周辺にあったことが判明します。順に見ていくと、「天神縁起絵巻」が完成した半年後に義満は北野天満宮を訪れ、寂濟が描いたものと思われる絵巻を披見しています。これは同絵巻を義満が寄進したことを示していると考えられます。「目連尊者絵」は釈迦弟子の目連が地獄から母を救う逸話を主題とし、絹本に描かれた豪華な絵巻だったようですが、その奥書が記された嘉慶2年6月は義満が母同然に遇した日野宣子(義満正妻日野業子の叔母)の七回忌祥月にあたります。宣子は義満の宮廷進出を手助けした恩人であり、その追善の意味をこめてこの絵巻を寂濟に描かせたのでしょうか。応永9年には、前年に焼失した後小松天皇の土御門内裏が再建されました。その際、旧例に従って紫宸殿内には中国の賢聖や名臣を描いた「賢聖障子絵」が描かれています。この内裏再建において資金を提供し、完成に至るすべてを主導したのは義満であったことから、寂濟が起用されたのも義満との関係に基づくと推測されます。その三年後、寂濟は禁

裏において行われた後円融天皇十三回忌の法華八講を屏風に描いています。実は、この法事は義満が初めて宮中において上皇同然の待遇を受けた記念すべきものであり、寂濟に絵を注文したのが義満の寵童・御賀丸であったことを勘案すると、ここでも寂濟は義満の御用を務めていることが指摘できます。こうした義満と寂濟との密接な関係は、応永15年(1408)の義満没後も継続します。応永21年(1414)は義満七回忌に当たりますが、その追善のために制作されたと考えられる「融通念仏縁起絵巻」(清凉寺蔵)は寂濟の唯一の現存作例であり、六名の参加絵師中、寂濟は最も重要な上巻冒頭の二段分を描いています。加えて、同年5月6日の義満祥月命日に法身院(醍醐寺三宝院の洛中の里坊)にて修された曼荼羅供の本尊も六角絵所が描いたものでした。以上のように、寂濟の活動は義満の御用絵師と称するに相応しいものがあるといえることができるでしょう。

では、寂濟はいったいどこから絵師としての基盤を継承したのでしょうか。ここで手がかりになるのは寂濟の二つの活動基盤、すなわち足利將軍家と醍醐寺です。藤原行光は足利尊氏・義詮の周辺で活躍し、晩年は義満元服の画事に

も参加しています。そして、尊氏が將軍家の正統性を主張するために制作させた「泰衡征伐絵」のプロデューサー的役割を果たしたのは醍醐寺の賢俊でした。つまり、行光と寂濟(藤原光増・光益)は、これら二つの後ろ楯の合致や、藤原氏でいずれも「光」を通字とすることから考えて親子であると推定され、両者の年齢も矛盾しません。また、寂濟の次に絵所預に就任したと推定される藤原光重(～1390～92)は所領関係の文書が残るのみでその作例は確認できない絵師ですが、おそらく行光の子であり、寂濟が兄、光重が弟であったと考えられます。

最後に、寂濟の画風について触れておきたいと思います。清凉寺本「融通念仏縁起絵巻」の寂濟担当段(図)を見ると、丁寧な定規引きされた建築物の描法や人物の姿態などに破綻はなく、前時代のやまと絵の伝統を確実に継承していることがわかります。その反面、地面や土坡に金銀泥を多用する点、動物的に屈曲する樹木の表現などからは、装飾化や形態の奇矯性への志向を認めることができます。こうしたバロック的ともいえる寂濟の画面は、金閣に象徴される義満の美意識を反映しているのかもしれない。(高岸輝)

(図)融通念仏縁起絵巻(清凉寺蔵)上巻第一段部分



季刊 美のたより No.148

平成16年10月9日

発行 大和文華館